

書評

野村総一郎 著

内科医のためのうつ病診療(第2版)

松村真司

一般医の目線で記載されたうつ病の解説書

当院には時に医学生や研修医が診療所実習に訪れる。実習が終わった後には必ず、彼らが実習中に受けた印象を聞くことにしている。患者との距離の近さを挙げる学生がもちろん多いが、それとともに「診療所には精神面の問題をもつ人がこんなに多いと思わなかった」との印象を述べる実習生が多い。不安障害、認知症などとともに、身体的愁訴が前景に立ったうつ病患者は本当に数多い。最近ではうつ病に関する啓発も増え、患者自らが「自分はうつ病ではないか」と考えて訪れる患者も多くなってきている。

著者自身も記しているが、認知症、高血圧、糖尿病などと並び、うつ病は疾患の罹患率とその症状の多彩さ、そのアウトカムの重大さから考えると、専門家のみですべてに対応することは現実的ではない。著者によると、内科医のうつ病診療のレベルが期待された水準にないことが、本書のような啓発書を書くきっかけだったとのことである。確かに、これほどありふれた疾患であるにもかかわらず、卒前・卒後における研修機会は十分とはいえない。精神科医に相談をすることも、地域に出してしまうとなかなか容易ではない。また、地域によっては精神科医の診察のアクセスが悪い場合もあり、その場合には好むと好まざるとに関わらず、非精神科医が治療の相当の部分まで担当せざるを得ない場合もある。できれば専門医に診療してもらいたいと思いつつも、薄氷を踏む思いで診療をしている非専門医はかなりの数に上るのではない

だろうか。

本書は、わが国のこの分野の第一人者である野村総一郎先生によって書かれた啓発書が改訂されたものである。第一版は内科医がうつ病の知識を得るためのテキストとして好評を博してきた。内科医のための、とうたっているが、内容は内科医に限らずすべての臨床医や、一部のコメディカルや患者家族にも有用である。第一版の改訂とはいっても、近年の診断、治療方法の変化(特に SSRI/SNRI の扱い)を踏まえて大幅に書き改められている。前書きにあるように、「うつ病の概念を理解する」というポリシーが本書のすべての記載にわたって貫かれ、必要十分な内容が頭にすっと入ってくる大変実用的なものである。特に野村先生ご自身の経験が診断時の注意、初期対応のポイント、薬の「使い勝手」、典型例などにふんだんにちりばめられており、今日からの診療にすぐにでも役に立つ内容になっている。

わが国のうつ病診療の質を高めるためには、一般医、コメディカル、患者・患者家族、社会との協同作業がどうしても必要である。そのためにも一般医と専門医との交流がより緊密なものになることが望ましい。本書のように一般医の目線で記載された解説書が、他の専門疾患においても数多く世に出されることを一般医の一人として望む次第である。

(松村医院院長)

●A5 152 頁 2008 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税) 医学書院